
ガラス玉

ロースト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガラス玉

【Nコード】

N2138M

【作者名】

ロースト

【あらすじ】

少女と少年の話。ちょっとばかりインパクトが足りないような気がします。

ガラス玉

ここは、古い教会

人々に忘れ去られてしまった。

まるで、

ここだけは時間が止まったようだ……。

時に取り残されている。

だが、

この教会に毎日通う少女がいる。

毎日毎日

人々が眠りについている時間から

人々が各々の家へと帰る時間まで

少女はまるで憑かれているかのように身じろぎ一つしない。

日が昇るとともに教会へ、日が沈むとともに教会を離れる。

一日中、飲まず、食わず、身じろぎもせず、ただただ祈る。

異様なほどに美しく、綺麗な教会がある。

周りが変わってもそこにただ、あるだけ。

ずっと昔に建てられた教会何百年も前に。

この教会は、時が経っていない。

周りには緑の生氣あふれる薔薇園が広がっている。

少女は、毎日毎日潜り抜けてここまで来る。

少女はこの教会にしか来ない。

少女は帰っていく。

だが、帰る場所はない。

帰る場所など、どこにもない。

少女はどこにも、いない。

少女はいろんなところにいる。

ふと気付けば、街中に。

ふと気付けば、川のほとりに。

少女に帰る場所はない。

少女は目的を持って動いていない。

まるで、感情を持たない人形のように。

それはガラス玉の眼を持つ少女の話。

深い深い薔薇園の中に建てられた小さな教会で、少女は今日も一人で祈っている。

神なんていないと分かっているのに。何年も何年もずっと繰り返してきた。

実年齢よりも幼くみえるその少女の瞳は、完全なまでの絶望を見してきた。

それでも強い意思がそこにあつた。

が、その眼の輝きは今、失われ、何も移していない。

まるで、ガラス玉のようだ。表情もまるで生きていない。

背丈の小さい少女には少し大きいようにみえる服装は華やストライプの模様がついたレースやリボン・フリルがたっぷりついた白と黒の靴と蝶と花の刺繍の入った白のペチコートに黒のドレスでとてもかわいらしい。

少女の綺麗な金髪に黒と白の服装はまるで合っていない、が、とても合っている。

そんな矛盾している少女はどこか儂げで自嘲している雰囲気纏わり憑いている。

少女の頭は黒のヘアバンドに白のレースと黒白のリボンがついていて、サラフワロングヘアに飾ってある。

その少女はまるで、悪魔と天使が交じり合ったようなイメージになっている。

背中には小さなかわいらしい蝶のような羽がついていても全然違和感なく、極自然に似合いそうだ。

その少女の名は、Anjer【アンジェラ】

そしてこの物語はどこかであった不思議な不思議な物語

昔々、あるところに小さな教会がたてられました。

その教会は人々が近付けない、深い深い薔薇園の中央に建てられました。

薔薇園と教会は、ある若い女性が自分の全財産と命を懸けて作りました。

薔薇園はとても大きくて、中に入ると陰になってしまいとても暗いです。

でも、その薔薇園の中央は、穴の様に視界が開けています。

そこには光が充満していて、とても明るく、とても綺麗でした。たまに、光がそこから抜けなくなり虹になることもありました。

そこに、すてきな教会が建てられています。

ステンドグラスが光の乱反射によって、常に輝いています。教会の中に入ると、さぞ、きれいでしよう。

光の世界に迷い込んだように。

まるで、まるで……

本当に異世界に迷い込んだように。

でもそれを見ることが出来るのは今、誰もいません。

この教会の主は今、いないのです。主が帰ってくる事を望み、時を止めてしまったのです。朽ちる事を放棄し、待ち続ける事を選んだのです。ただ、そこにあり続けることを。

女性はこの薔薇園の中央に教会を建てようと思いました。

それはひとつの約束でした。

教会をこの薔薇園の中に建てることを女性が小さな少女だった時一人の少年と約束をしたのでした。女性はその約束を今果たそうとしていたのです。

女性は貴族でした。少年は平民でした。普通なら会う事も無く人生を終えていたでしょう二人はそれでも、恋に落ちました。たった一度しか会わなかったけど、一緒にいたのはちよつとの間だったけど、それでも、幸せな時間を過ごしました。そして日が落ち、別れ際、約束したのです。二人で幸せに過ごせる場所を作ろうと。教会を作ろうと。そして、誰も邪魔できないよう、誰も来ないよう、教会を中心に薔薇園を作ろうと。そう約束しました。その約束は女性にとって一番大切なものです。女性は大人になって、教会を作ろうと思いました。

あれ以来少年にあったことはありませんが、約束を信じて、女性は

教会を建てました。薔薇園も一緒に。

女性はお金持ちでしたがこの薔薇園を作るのだけでほとんどのお金がなくなっていました。それでもがんばってお金を貯め、そのお金で教会をたてました。それがこの教会です。

この教会は、薔薇園の中心に建てられています。

この薔薇園は街の全てに広がっています。

この街はあの女性が全てを買い取り、住んでいるのはあの女性だけです。

この薔薇園を管理するのは全てこの女性だけです。

この街は女性が少女の時に少年と出会った街でした。

この街の中心は少年と女性が出会った大樹です。

この教会は大樹の隣に立てられています。

それはさぞかし大変だったでしょう。

そのため、女性は短命でした。

この教会を建てたすぐ後に死んでしまいました。

その女性の最後はとても神秘的でした。

女性はいつも教会に祈りを捧げていました。

その姿は聖母マリアのような慈悲と淑女の厳肅さにあふれていても美しかったです。

女性は、死ぬ直前まで祈りを捧げていました。そしてそのまま死んでいきました。

女性は生きている間も死んだ後もきれいでした。でも、どこか儚さが漂います。

女性が死んですぐに女性と同年代ぐらいの一人の男性が教会に入ってきました。

男性は女性が死んでいるのをわかると、女性を教会の教壇に運びま

した。

その後、教会をすぐに飛び出し、手に傷をつけながら、薔薇園の薔薇を取ってきて、薔薇の冠を作りました。その薔薇は青い薔薇でした。薔薇園にはいろんな色の薔薇がありました。青い薔薇は自然には咲かないので、珍しいのです。その青い薔薇を集めるのはさぞかし大変でしたでしょう。手が薔薇の棘で傷つき、血が滲んでいきます。それでも丁寧に丁寧に一本一本棘を取り除いて冠を作りました。そして、女性の頭にそれを乗せました。青い薔薇の冠は女性にすごく似合いました。それは神秘的で、でも、薔薇が青いからなのか女性が死んでいるからなのか、すごく切なく儚く似合っていました。そして男性は、静かに、人に知られないように、教会の中央で、泣きました。涙が枯れるまで泣きました。静かに静かに、飲み食いもせず。

聞えるのは青年の静かな泣き声と、小鳥の悲しそうなさえずりだけでした。

毎日毎日、薔薇園の世話をした後に教会に来て泣きました。何年も何年も。

そして、男性は遂に死んでしまいました。男性もまた短命でした。女性の横に寄り添うようにして。

女性は未だ綺麗に教壇の上に横たえられています。

腐蝕しているわけではなく、綺麗に綺麗に、生前のままです。

何年も何年も。

教会はあり続けました。時が止まってしまったように変わらず、変わらず、ただそこにあるだけでした。

その日が繰り返されているように、洪水も、地震もなく。

そして今、女性と男性が死んでしまった教壇には、七色の光がずっ

と浴びせられています。きれいにきれいに、光を浴びながら二人は寄り添って眠ったように死んでいます。

そんな、時が凍って止まってしまったような教会に何百年も年月が経ったある日の話です。一人の少女がこの教会に来ました。

その少女がどこから来たのか、どうしているのか、何もわかりません。それでも、少女が来た時、何百年も放置されていたはずの薔薇園は、まだ、綺麗に咲き誇っていました。

教壇の上で死んでしまった二人の男女もそのままの状態で、まるでおとぎの国のお姫様のように眠っているとしか思えないほどに綺麗に死んでいました。

少女はまだ稚女といっても過言ではない、10歳ぐらいでした。でも、その光景を見て何かを悟ったように、泣きました。

泣いて泣いて、涙が枯れるまで泣きました。その後も、毎日毎日そこに来て少女は教会で祈ります。

その少女こそAnjerでした。

今では、その少女は14歳ですが、同じような服を着て、今でも毎日毎日この教会で祈ります。

それからまた月日が経ち、Anjerは、一人の青年に会いました。その青年もまた、どこから来たのか、どうしているのか、何もわかりません。

ここは誰も知らないはずの誰も来られないところのはずなのに。

複雑に絡まった薔薇は主以外には決して道を開こうとせずそこにあり続けるのに。

必ず迷ってしまう迷宮なのに。傷一つなく二人は迷宮を通り抜け、この薔薇園の奥深くにある教会へと導きました。

まるで、まるで二人が主だとも言うように。教壇の上に横たえられているあの若い女性とあの若い男性だとも言うように。生まれ変わりとも言うように。

少女が教会に来たとき、青年が教会で祈っていました。青年は祈りを終えて振り返り、Anjerを見ました。青年は少女と同じぐらいの16歳に見えます。硬派そうな青年で、この青年もまた少女と同じような、何も映さない、ガラスの眼をしていました。青年の服装は、少女と同じ、黒をベースとした白と黒の服でした。青年の方は少女に比べてフリルが少ししかありませんが、それでもフリルやリボンのたくさんついた服でした。

「anjer…」

青年は呼びました。まるで信じられないように。どうしてそこにいるのかと不思議そうに。

青年は少女を確かめるようにもう一度名前を呼びました。

「anjer」

少女の今まで何も映していなかった瞳が青年をきちんと映し出し、瞳を潤ませながら青年に向かって走り出しました。青年もそれをきちんと瞳に映し出し、瞳を少し潤ませて、笑顔で少女に向かって走り出しました。

青年はもう一度言いました。今度は嬉しさを込めて。

「anjerr」

少女は青年に思いつきり抱きつき、瞳は涙でぬれているけれど安堵したような笑顔をみせました。青年は少女の存在を確かめるように初めは恐々とやがてしつかりと抱きしめ返しました。少女と青年はお互いの温もりを感じてほっとしました。

「anjerr」

安心させるように、優しく呟きました。そして、二人はキスをしました。長く長く。

そして何回も何回も。永遠の時間が流れているようでした。

青年は何度も何度も少女の名を口にします。少女の方は、言葉では表せないともいうように、青年をさらに力を込めて抱き返します。たった今会ったばかりの二人は、たった今会ったばかりで恋をしました。

でも経った今会ったばかりの二人はでも、ずっとずっと前から愛し合っていました。

二人は、まだ結婚できる歳じゃないけれど、この教会で、誰にも知られずに恋をし、誰にも知らず婚約をしました。

誰も見ていないところで二人は誓い合ったのでした。

ウェディングドレスやタキシードではなく、二人が最初に会ったときの服を着ました。

二人が最初に出会った服というのは、この少女anjerrと青年が会った時の服ではありません。もっと前に、今の二人が出会う、何

百年も前にこの町の中心、この教会がたつ前、この場所であの若い女性とあの若い男性が少女や青年だった時に来ていた服です。そうです、この二人はあの二人の生まれ変わりだったのです。そして、この場所で会い、この場所で死んでいったあの二人はこの場所で会い、この場所で愛し合いました。あの二人とこの二人は顔がそれぞれ似ていました。そっくりというより、生き写しといった方がいい具合に。

そして青年は言いました。

「Anjer、僕は君がその顔だから愛したわけじゃないよ。ここでもう一度会って、好きになったんだ。今の君を愛したんだ。」少女も言いました。

「わたしも。私も、あなたがその顔だから好きになったわけではなく、ここで、もう一度あなたを好きになったのよ。あなたがこの顔だから好きになったと言ったら、私はあなたに平手打ちをしていたわ。」

青年は少し苦笑いして、

「平手打ちはひどいな。君が俺の言ったことに同意しなかったら俺こそ君を嫌いだといって、君をここから追い出すつもりだったよ。」少女は言いました。

「それこそひどいわ。どっちも同意してよかったわ。」

「そうだね。」

と青年も言いました。

そして、誓いのキスをしました。長く長く。壇上にいた女性と男性はもういません。

でもあの女性と男性も笑ったように思えました。そして、この町の時間が動き出します。

ガラス玉のように止まっていたこの町の時間が動き出します。

遠い昔に愛し合ったあの二人は今まで朽ちることが無かったのは、幻だったからかもしれなません。だってもうそこには何も無いのだ

から。二人にあたっていた光はそのまま、教会は見る見るうちに古くなっていきます。薔薇もどんどん枯れていきます。全ての時間が現代に追いついたのです。

また、もとのきれいな薔薇園と教会を作るには莫大なお金と時間がかかります。

元通りとはいかないけれど、すてきな薔薇園とすてきな教会はまた作れます。

形あるものいつかは壊れます。でも、また作る事を胸に秘めて、二人は恋をしました。

形あるものいつかは壊れます。でも、愛は壊れません。二人の気持ちがあれば不滅です。

二人の小さな小さな恋はまだ続きます。愛し合っている二人の恋はまだ続きます。

恋は永遠に終わりません。愛も永遠に終わりません。二人がお互いを好きならば。

結婚をした二人の恋もまだまだ続きます。いや、ここから恋は始まります。

きっかけは出会い。始まりは結婚、終わりは永遠に。

今、時が動き出しました。二人はスタート地点にいる。終わりはありません。

ただ、

ただただ、

「生きているうちにはいろいろあるけど、二人一緒なら大丈夫だろう」と確信を持ちながら歩いていきます。

ゆっくり、ゆっくり歩いていく。

果てしなく続く道を。

これは遠い昔の物語。遠い遠い昔の話。ガラス玉のように透き通った純粹な恋の話。あなたは生まれ変わりを信じますか。人々が皆、こなすてきな恋を出来たらいいですね。すてきな恋の物語。すてきなすてきな物語・・・

たくさんの方が幸せでありますように。

終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2138m/>

ガラス玉

2011年10月7日09時11分発行